



本間文庫

文庫 14

D 114

95

90

85

80





文庫14  
D114



この書の體裁は悉く藤島武二先生の  
意匠に成れり  
其紙裏みだれ髪の輪廓は戀愛の矢の  
一トを射たるにて矢の根より吹き  
出でたる花は詩を意味せるなり

冬 秋 夏 春 白 現 想  
代 の 小 説 受  
百 合

藤 島 武 二 畫

藤 白 蓮 春  
脂 の 舞  
化 百 は  
船 合 妻 思  
紫 船 合 妻 思

與謝野晶子著



みだれ髪

與謝野晶子著

臙脂紫

夜の帳ちかやにささめきあまき星の今を下界かみの  
人の鬢かみのほつれよ



歌にきけな誰れ野の花に紅き否いなむおもむ  
きあるかな春罪はるつみもつ子

髪かみ五尺ときなば水にやはらかき少女せうにょごこ  
ろは秘めて放たじ

血ぞもゆるかさむひと夜の夢のやど春を  
行、人神おとしめな

椿つばきそれも梅もさなりき白かりきわが罪問  
はぬ色いろ桃ももに見る

その子こ二十はたち櫛くしにながるる黒髪くろかみのおごりの  
春のうつくしきかな

堂の鐘かねのひくきゆふべを前髪まへかみの桃もものつぼ  
みにきやう経きやうたまへ君

紫にもみうらにほふみだれ籠をかくしわ  
づらふ宵の春の神

臙脂色は誰にかたらむ血のゆらぎ春のお  
もひのさかりの命

紫の濃き虹説きしさかづきに映る春の子  
眉毛かほそき

紀の海をひがしへわしる黒潮に得たるお  
もひの名に假りし戀

まゐる酒に灯あかき宵を歌たまへ女はら  
から牡丹に名なき

海棠にえうなくときし紅すて夕雨みや  
るたゆき濃腫

水にねし嗟峨の大堰のひと夜神紹蚊帳の  
裾の歌ひめたまへ

春の國戀の御國のあさぼらけしるきは髪  
か梅花のあふら

今はゆかむさらばと云ひし夜の神の御裾  
さはりてわが髪ぬれぬ

細きわがうなじにあまる御手のべてささ  
へたまへな歸る夜の神

清水へ祇園をよぎる櫻月夜こよひ逢ふ人  
みなうつくしき

秋の神の御衣より曳く白き虹ものおもふ  
子の額に消えぬ

經はにがし春のゆふべを奥の院の二十五  
菩薩歌うけたまへ

山ごもりかくてあれなのみをしへよ紅つ  
くるころ桃の花さかむ  
とき髪に室むつまじの百合のかをり消え  
をあやぶむ夜の淡紅色よ

雲ぞ青き來し夏姫が朝の髪うつくしいか  
な水に流るる

夜の神の朝のり歸る羊どらへちさき枕の  
したにかくさむ  
みぎはくる牛かひ男歌あれな秋のみづう  
みあまうさびしき

やは肌のあつき血汐にふれも見でさびし  
からずや道を説く君

許したまへあらずばこそ今のわが身う  
すむらさきの酒うつくしき  
わすれがたきとのみに趣味をみとめませ  
説かじ紫その秋の花

人かへさず暮れむの春の宵ごころ小琴に  
もたす亂れ亂れ髪

たまいらに髪かみのひとすまきれし音ねを小琴こご  
と聞きし春の夜の夢

春にぬれて君こし草の門かどよおもされ顔  
の海棠の夕



小草いひぬ「酔へる涙の色にさかむそれま  
で斯くて覺めざれな少女」

牧場いでて南にはしる水ながしさても緑  
の野にふさふ君

春よ老いな藤によりたる夜の舞殿るなら  
ぶ子らよ東の間老いな

雨みゆるうき葉しら蓮繪師の君に傘まゐ  
らする三尺の船

御相いとごしたしみやすきなつかしき若  
葉木立の中の盧遮那佛

さて責むな高きにのぼり君みずや紅の涙  
の永劫のあと

春雨にゆふべの宮をまよひ出でし小羊君  
をのろはしの我れ

ゆあみする泉の底の小百合花二十の夏を  
うつくしと見ぬ

みたれごちまごひごちを頻なる百合  
にむ神に乳おほひあへず

くれなるの薔薇のかさねの唇に靈の香の  
なき歌のせますな

旅のやぎ水に端居の僧の君をいみじと泣  
きぬ夏の夜の月

春の夜の闇の中くるうまき風しばしかの  
子が髪に吹かざれ



水に飢ゑて森をさまよふ小羊のそのまな  
ざしに似たらすや君

誰ぞ夕ゆふひがし生駒いこまの山の上のまよひの雲  
にこの子うらなへ

悔くいますなおさへし袖そでに折つれし劔つるぎつひの  
理想りようの花はなに刺さあらじ

額かぶごしに曉あけの月つきみる加茂川かものがわの淺水あさみづ色のみ  
だれ藻染もぞめよ

敷居しきいごしに筆ふでとりまつる朝あさのうた草くさのみ  
だれよなめしかしこし

なほ許ゆるせ御國みくに遠とほくば夜よの御神みかみ紅べに盃さき船ふねに送おく  
りまゐらせむ

狂ひの子われに焰ほのほの翅はねかるき百三十里あ  
わただしの旅

今ここにかへりみすればわがなさけ闇くらを  
おそれぬめしひに似たり

うつくしき命を惜しと神のいひぬ願ひの  
それは果してし今

わかき小指こさき胡粉ごこなをこくにまごひあり夕ぐ  
れ寒き木蓮の花

ゆるされし朝よそほひのしばらくを君に  
歌へな山の鶯

ふしませこそその間まさぶりし春の宵衣い桁かに  
かけし御袖かづきぬ

みだれ髪を京の島田にかへし朝ふしてゐ  
ませの君ゆりおこす  
しのび足に君を追ひゆく薄月夜右のたも  
この文がらおもき  
紫に小草が上へ影おちぬ野の春かせに髪  
りづる朝

繪日傘をかなたの岸の草になげわたる小  
川よ春の水ぬるき  
しら壁へ歌ひとつ染めむねがひにて笠は  
あらざりき二百里の旅  
嵯峨の君を歌に假せなの朝のすさびすね  
し鏡のわが夏姿

ふさひ知らぬ新婦かざすしら萩に今宵の  
神のそと片笑みし

ひと枝の野の梅をらば足りぬべしこれか  
りそめのかりそめの別れ

鶯は君が聲よともごきながら緑のとばり  
そとかかけ見る

紫の虹の滴り花におちて成りしかひなの  
夢うたがふな

ほととぎす嵯峨へは一里京へ三里水の清  
瀧夜の明けやすき

紫の理想の雲はちぎれく仰ぐわが空を  
れはた消えぬ

乳ぶさおさへ神祕のそばりそとけりぬこ  
こなる花の紅ぞ濃き

神の背にひろきながめをねがはずや今か  
たかたの袖こむらさき

誰かよくこころとかむと相笑みぬ君がか  
まし晝わが染めし歌

ひく袖に片笑もらす春ぞわかき朝のうし  
ほの戀のたはぶれ

くれの春隣すむ晝師うつくしき今朝山吹  
に聲わかかりし

郷人にとなり邸のしら藤の花はどのみに  
問ひもかねたる

人にそひて櫛ささぐるこもり妻母なる君  
を御墓に泣きぬ

なにどなく君に待たるるこちして出で  
し花野の夕月夜かな

おばしまにおもひはてなき身をもたせ小  
萩をわたる秋の風見る

ゆあみして泉を出でしわがはだにふるる  
はつらき人の世のきぬ

賣りし琴にむつびの曲をのせしひびき逢  
魔がどきの黒百合折れぬ

うすものの二尺のたもとすべりおちて螢  
ながるる夜風の青き

戀ならぬねざめたたすむ野のひろさ名なし  
小川のうつくしき夏

このおもひ何とならむのまごひもちしそ  
の昨日きのうすらさびしかりし我れ

おりたちてうつつなき身の牡丹見ぬそぞ  
ろや夜よるを蝶とらのねにこし

その涙のごふるにしは持たざりきさびし  
の水に見し二十はつか日月つき

水十里ゆふべの船をあだにやりて柳によ  
る子ぬかうつくしき(なごめ)

旅の身の大河おほなほひとつまごはむや徐ゆるかに日ひ  
記きの里の名けしぬ(旅びこ)



小傘とりて朝の水くみ我とこそ穂麥あを  
あを小雨ふる里

おとに立ちて小川をのぞく乳母が小窓小  
雨のなかに山吹のちる

戀か血か牡丹に盡きし春のおもひこのゐ  
の宵のひとり歌なき



長き歌を牡丹にあれの宵の殿妻みととなる身の  
我れぬけ出でし

春三月みつき柱ちおかの琴に音たてぬふれしそぞ  
ろの宵の亂れ髪

いづこまで君は歸るとゆふべ野にわが袖  
ひきぬ翅はねある童わらわ

ゆふぐれの戸に倚り君がうたふ歌「うき里  
去りて往きて歸らじ」

さびしさに百二十里をそぞろ來ぬと云ふ  
人あらばあらば如何ならむ

君が歌に袖かみし子を誰と知る浪速の宿  
は秋寒かりき

その日より魂にわかれし我れむくる美し  
と見ば人にとぶらへ

今の我に歌のありやを問ひますな柱なき  
織<sup>オリ</sup>絃<sup>イト</sup>これ二十五<sup>イハ</sup>絃<sup>イト</sup>

神のさだめ命のひびき終<sup>ハヤシ</sup>の我世<sup>ヨ</sup>琴<sup>コト</sup>に斧<sup>ノ</sup>う  
つ音<sup>ネ</sup>ききたまへ

人ふたり無才の二字を歌に笑みぬ戀二萬  
年ながき短き

蓮の花船

漕ぎかへる夕船おそき僧の君紅蓮や多き  
しら蓮や多き

あづまやに水のおとさく藤の夕はづしま  
すなのひくき枕よ

御袖ならず御髪みかみのたけときこえたり七尺  
いづれしら藤の花

夏花のすがたは細きくれなるに真書まひらいき  
むの戀よこの子よ

肩かたおちて經きんにゆらぎのそぞろ髪をとめ有  
心者しんじや春の雲こき

とき髪を若枝わかえにからむ風の西よ二尺に足  
らぬうつくしき虹

うながされて汀みぎはの闇くらに車おりぬほの紫の  
反橋かたはしの藤

われとなく梭かまきの手とめし門かどの唄うた姉あねがゑま  
ひの底はづかしき

ゆあがりのみじまひなりて姿見に笑みし  
昨日きのふの無なきにしもあらず

人まへを袂すべりしきぬでまり知らずと  
云ひてかかへてにげぬ

ひとつ籠かごにひひなをさめて蓋ふたとちて何と  
なき息桃いきももにはばかり

ほの見しは奈良のはづれの若葉宿わかばしゆくうすま  
ゆすみのなつかしかりし

紅べにに名の知らぬ花さく野の小道せみちいそぎた  
まふな小傘こがさの一人ひとり

くだり船昨夜ふゆ月かげに歌そめし御堂みだうの壁  
も見えず見えすなりぬ

師の君の目を病みませる庵の庭へうつし  
まゐらす白菊の花

文字ほそく君が歌ひとつ染めつけぬ玉虫  
ひめし小篋の蓋に

ゆふぐれを籠へ鳥よぶいもうこの爪先ぬ  
らす海棠の雨

ゆく春をえらびよしある絹袷衣ねびのよ  
そめを一人に問ひぬ

木下闇わか葉の露か身にしみてしづくか  
とりぬふたりくむ手に

母よびてあかつき問ひし君さいはれそむ  
くる片頬柳にふれぬ

のろひ歌かきかさねたる反古とりて黒き  
胡蝶をおさへぬるかな

額しろき聖よ見すやクぐれを海棠に立つ  
春夢見姿

笛の音に法華經うつす手をとどめひそめ  
し眉よまだうらわかき

白檀のけむりこなたへ絶えずあふるにく  
き扇をうばひぬるかな

母なるが枕經よむかたはらのちひさき足  
をうつくしと見き

わが歌に睡のいろをうるませしその君去  
りて十日たちにはけり

かたみぞと風なつかしむ小扇のかなめあ  
やふくなりけるかな

春の川のりあひ舟のわかき子が昨夜の泊  
の唄わたましき

泣かで急げやは手にはばき解くえにしえ  
にし持つ子の夕を待たむ

燕なく朝をはばきの紐ぞゆるき柳かすむ  
やその家のめぐり

小川われ村のはづれの柳かげに消えぬ姿  
を泣く子朝見し

鶯に朝寒からぬ京の山おち椿ふむ人むつ  
まじき



道たまノ蓮月が庵のあとに出でぬ梅に  
相行く西の京の山  
君が前に李春蓮説くこの子ならずよき墨  
なきを梅にかこつな  
あるときはねたしと見たる友の髪に香の  
煙のはひかかかるかな

わが春の二十姿はたちすがたと打ぞ見る底くれなるの  
うす色牡丹  
春はただ盃にこそ注ぐべけれ智慧あり顔  
の木蓮や花  
百ももこそをそれにあやまついのちありと知  
らでやさしき歌よむか君

人そぞろ宵の羽織の肩うらへかきしは歌  
か芙蓉といふ文字

琴の上に梅の實おつるやどの晝ちかき清  
水に歌ずする君

うたたねの君がかたへの旅づつみ戀の詩  
集の古きあたらしき

戸に倚りて菖蒲賣る子がひたひ髪にかか  
る薄露にほひある朝

五月雨もむかしに遠き山の庵通夜する人  
に卯の花いけぬ

四十八寺そのひと寺の鐘なりぬ今し江の  
北雨雲ながる

人の子にかせしは罪かわがかひな白きは  
神になどゆづるべき

朝顔あさがおをゑぎぬにすりて袖そでひきて口とき君  
が歌を乞ふかな

夕ふるはなさけの雨よ旅の君ちか道とは  
で宿とりたまへ

巖いわをはなれ谿たにをくだりて躑つとみ躑つとみをりて都の  
繪師と水に別れぬ

春の日を戀に誰れ倚るしら壁ぞ憂きは旅  
の子藤たそがるる

油あぶらのあと島田のかたと今日けふ知りし壁かべに李すもも  
の花ちりかかる

うなじ手にひくきささやき藤の朝をよし  
なやこの子行くは旅の君

まごひなくて經ずする我と見たまふか下  
品の佛上品の佛

ながしつる四つの笹舟紅梅を載せしがこ  
とにおくれて往きぬ

奥の室のうらめづらしき初聲に血の氣の  
ほりし面わかき人

人の歌をくちずさみつつ夕よる柱つめた  
き秋の雨かな

小百合さく小草がなかに君まてば野末に  
ほひて虹あらはれぬ

かしこしといなみていひて我とこそその  
山坂を御手に倚らざりし

鳥邊野は御親の御墓あるところ清水坂に  
歌はなかりき

御親まつる墓のしら梅中に白く熊笹小笹  
たそがれそめぬ

男きときよし載するに僧のうらわかき月にく  
らしの蓮はすの花船はねぶね

經にわかき僧のみこゑの片かた明あかり月の蓮船はすぶね  
兄あにこぎかへる

浮葉うきはさるとぬれし袂たもとの紅あかのしづく蓮はすにそ  
そぎてなさけ教へむ

こころみにわかき唇ふれて見れば冷かな  
るよしら蓮の露

明くる夜の河はばひろき嵯峨の欄きぬ水  
色の二人の夏よ

藻の花のしろきを摘むと山みづに文がら  
濡ちぬうすものの袖

巾の子を木かげに立たせ繪にうつす君が  
ゆかたに柿の花ちる

誰が筆に染めし扇ぞ去年までは白きをめ  
でし君にやはあらぬ

おもぎしの似たるにまたもまごひけりた  
はぶれますよ戀の神々

五月雨に築土くづれし鳥羽殿のいぬるの  
池におもだかさきぬ

つばくらの羽にしたたる春雨をうけてな  
でむかわが朝寐髪

しら菊を折りてゑまひし朝すがた垣間み  
しつと人の書きこし

八つ口をむらさき緒もて我れとめじひか  
ばあたへむ三尺の袖

春かせに櫻花ちる層塔のゆふべを鳩の羽  
に歌そめむ

憎からぬねたみもつ子とききし子の垣の  
山吹歌うて過ぎぬ



おばしまのその片袖ぞおもかりし鞍馬を  
回へ流れにし霞

ひとたびは神より更ににほひ高き朝を  
つみし練ねの下襲したかきね



白百合

月の夜の蓮のおぼしま君うつくしうら葉  
の御歌わすれはせずよ

たけの髪をどめ二人に月うすき今宵しら  
蓮色まごはずや

荷葉<sup>は</sup>なかば誰にゆるさむ上の御句<sup>み</sup>ぞ御袖<sup>み</sup>  
片取<sup>かた</sup>るわかき師の君

おもひおもふ今のところに分ち分かず君  
やしら萩われやしる百合

いづれ君ふるさと遠き人の世ぞと御手は  
なちしは昨日<sup>きの</sup>の夕

三たりをば世にうらぶれしはらからとむ  
れ先づ云ひぬ西の京の宿

今宵<sup>こよひ</sup>まくら神にゆづらぬやは手なりたが  
はせまさじ白百合の夢

夢にせめてせめてと思ひその神に小百合  
の露の歌ささやきぬ

次のまのあま戸そとくるわれをよびて秋  
の夜いかに長きみぢかき

友のあしのつめたかりきと旅の朝わかき  
わが師に心なくいひぬ

ひごまおきてをりをりもれし君がいきそ  
の夜しら梅だくと夢みし

いはず聴かずただうなづきて別れけりそ  
の日は六日ふたり二人と一人ひとり

もろ羽かはし掩ひしそれも甲斐なかりき  
うつくしの友西の京の秋

星となりて逢はむそれまで思ひ出でな一  
つふすまに聞きし秋の聲

人の世に才秀でたるわが友の名の末かな  
し今日秋くれぬ

星の子のあまりによわし袂あげて魔に  
鬼にも勝たむと云へな

百合の花わざと魔の手に折らせおきて拾  
ひてだかむ神のころか

しろ百合はそれその人の高さおもひおも  
わは艶ふ紅芙蓉とこそ

さはいへどそのひと時よまばゆかりき夏  
の野しめし白百合の花

友は二十ふたつこしたる我身なりふさは  
すあらし戀と傳へむ

その血潮ふたりは吐かぬちぎりなりき春  
を山やま蓼たでたづねますな君

秋を三人みたり椎の實なげし鯉やいづこ池の朝  
かせ手と手つめたき

かの空よ若狭は北よわれ載せて行く雲な  
きか西の京の山

ひと花はみづから溪にもとめきませ若狭  
の雪に堪へむくれない紅

白百合のちさきが一つゆく水にながれて  
いにぬ物も云はずして

京はものつらきところと書きさして見  
おろしませる加茂の河しろき

恨みまつる湯におりしまの一人<sup>ひとり</sup>居<sup>ゐ</sup>を歌な  
かりきの君へだてあり

秋の衾<sup>ふすま</sup>あしたわびし身うらめしきつめた  
きためし春の京に得ぬ

わすれては谿へおりますうしろ影ほそき  
御肩<sup>みかた</sup>に春の日よわき

京の鐘この日このとき我れあらずこの日  
このとき人と人を泣きぬ

琵琶<sup>びわ</sup>の海山ごえ行かむいざと云ひし秋よ  
三人<sup>みたり</sup>よ人そぞろなりし

京の水の深み見おろし秋を人の裂きし小<sup>こ</sup>  
指<sup>ゆび</sup>の血のあと寒き

山蓼のそれよりふかきくれなるは梅よは  
ばかれ神にとがおはむ

魔のまへに理か想ひくださしよわき子と友の  
ゆふべをゆびさしますな

魔のわざを神のさだめと眼を閉ぢし友の  
片手の花あやぶみぬ

はたち妻

露にさめて睡もたぐる野の色よ夢のただ  
ちの紫の虹

この日ごろあやしきくせのつきそめてあ  
らぬ反古にも胸さわぐかな

何となきただ一ひらの雲に見ぬみちびき  
さとし聖歌のほひ

男つよし別れの今をうさもなげにされ歌  
おほき君にもあるかな

淵の水になげし聖書を又もひろひ空仰ぎ  
泣くわれまごひの子



聖書だく子人の御親の墓に伏して彌勒の  
名をば夕に喚びぬ

神ここに力をわびぬとき紅のほひ興が  
るめしひの少女

瘦せにたれかひなもる血ぞ猶わかき罪を  
泣く子と神よ見ますな

おもはずや夢ねがはずや若人よもゆるく  
ちびる君に映らずや

いくたびも家相に悪しとききながらぬき  
がてにするくね柳かな

あまきにがき味うたがひぬ我を見てわか  
きひじりの流しにし涙

歌に名は相問はざりきさいへ一夜ゑにし  
のほかの一夜とおぼすな

水の香をきぬにおほひぬわかき神草には  
見えぬ風のゆるぎよ

ゆく水のざれ言きかす神の笑まひ御齒あ  
ざやかに花の夜あけぬ

わが歌のなかのひとつに墨ひきてあらぬ  
怨をおひにけるかな

とどめあへぬそぞろ心は人しらむくづれ  
し牡丹さぎぬに紅き

男はおそろしからぬものの名といひし  
摩日のおれなつかしき

行く春の一絃一柱におもひありさいへ火  
かげのわが髪ながき

のらす神あふぎ見するにあはた暇おもしわが世  
の闇の夢の小夜中

そのわかき羊は誰に似たるやの瞳ひとみの御色  
野は夕なりし

あえかなる白きうすものまなじりの火か  
げの榮はえの咀くははしき君

紅梅にそぞろゆきたる京の山叔母の尾す  
む寺は訪はざりし

くさぐさの色ある花によそはれしひつぎ棺ひつぎのな  
かの友うつくしき



五つとせは夢にあらすよみそなはせ春に  
色なき草ながき里

すげ笠にあるべき歌と強ひゆきぬ若葉よ  
薫れ生駒葛城

据たるる紫ひくき根なし雲牡丹が夢の眞<sup>2</sup>  
畫しづけき

百合にやる天あめの小蝶のみづいろの翅はねにし  
つけの絲をとる神

ひとつ血の胸くれなるの春のいのちひれ  
ふすかをり神もとめよる

わがいだくおもかげ君はそこに見む春の  
ゆふべの黄き雲うみのちざれ

むねの清水あふれてつひに濁りけり君も  
罪の子我も罪の子

うらわかき僧よびさます春の窓ふり袖ふ  
れて經くづれきぬ

今日けふを知らず智慧の小石は問はでありき  
星のおきてと別れにし朝

春にがき貝かい多た羅ら葉えの名をききて堂の夕日  
に友の世泣きぬ

ふた月を歌にただある三本樹さんぽんじゆ加茂川千鳥  
戀はなき子ぞ

わかき子が乳ちちの香まじる春雨に上羽うへはを染  
めむ白き鳩われ

夕ぐれを花にかくるる小狐のにこ毛にひ  
びく北嵯峨の鐘

見しはそれ緑の夢のほそき夢ゆるせ旅人  
かたり草なき

胸と胸とおもひことなる松のかせ友の頬  
を吹きぬ我頬を吹きぬ

野<sup>の</sup>茨をりて髪にもかざし手にもとり永き  
日野邊に君まぢわびぬ

春を説くなその朝かぜにほころびし袂だ  
く子に君こころなき

夕庭の石にまどろむ秋の蝶つばさうるほ  
すしら露もがな

みなぞこにけふる黒髪ぬしや誰れ緋鯉の  
せなに梅の花ちる

秋を人のよりし柱にとがぬあり梅にこと  
かるきぬぎぬの歌

京の山のこぞめしら梅人ふたりおなじ夢  
みし春と知りたまへ

なつかしの湯の香梅が香山の宿の板戸に  
よりにて人まちし闇

詞にも歌にもなさじわがおもひその日そ  
のとき胸より胸に

歌にねて昨夜<sup>べ</sup>梶の葉の作者見ぬうつくし  
かりき黒髪の色



下京しもぎやうや紅屋べにやが門かどをくぐりたる男かわゆし  
春の夜の月

枝折戸あり紅梅さけり水ゆけり立つ子わ  
れより笑みうつくしき

しら梅は袖に湯の香は下のきぬにかりそ  
めながら君さらばさらば

二十はとせの我世の幸さいはうすかりきせめて  
今見る夢やすかれな

二十はとせのうすきいのちのひびきありと  
浪華の夏の歌に泣きし君

かつぐきぬにその間まの床とこの梅ぞにくき昔  
がたりを夢に寄する君

さもなきにほほゑみ見せて口にする金の  
扇をいやしと思ひぬ

君ゆくそその夕ぐれに二人して柱にそめ  
し白萩の歌

なさけあせし文みて病みておそろへてか  
くても人を猶戀ひわたる

夜の神のあともとめよるしら綾の鬢の香  
にくき春雨の宿

かたがはは紫襦子のふくさ帯べにの紅葉  
のなつかしきかな

このあした君があげたるみどり子のやが  
て得む戀うつくしかれな

戀の神にむくいまつりし今日の歌るにし  
の神はいつ受けまさむ

かくてなほあくがれますか眞善美わが手  
の花はくれなるよ君

くろ髪の千すぢの髪のみだれ髪かつおも  
ひみだれおもひみだるる

紫のわが世の戀のあさぼらけ諸手もろてのかを  
り追風おいかぜながき

このおもひ眞晝の夢と誰か云ふ酒のかを  
りのなつかしき春

みどりなるは學びの宮とさす神にいらへ  
まつらで摘む夕すみれ

そら鳴りの夜ごとのくせぞ狂ほしき汝よ  
小琴よ片袖かさむ(琴に)

ぬしえらばず胸にふれむの行く春の小琴  
とおぼせ眉やはき君(琴のいらへて)

去年ゆきし姉の名よびて夕ぐれの戸に立  
つ人をあはれと思ひぬ

戀うせぬ空にてる日のあるか今わが戀う  
せぬ戀うしなひぬ

ひと年をこの子のすがた絹に成らず畫の  
筆すてて詩にかへし君

白きちりぬ紅きくづれぬ床の牡丹五山の  
僧の口おそろしき

今日の身に我をさそひし中の姉小町のは  
てを祈れと去にぬ

秋もろし春みぢかしをまどひなく説く子  
ありなば我れ道きかむ

をしへたまへ虹の七いろうつくしき戀と  
はとほに見てあるものか

病みてこもる山の御堂に春くれぬ今日文  
ながき繪筆とる君

河ぞひの門小雨ふる柳はら二人の一人め  
す馬しろき

歌は斯くよ血ぞゆらぎしと語る友に笑ま  
ひを見せしさびしき思

雨の日をたてしままなる琴のどうへ二つ  
そめたる紅梅の歌

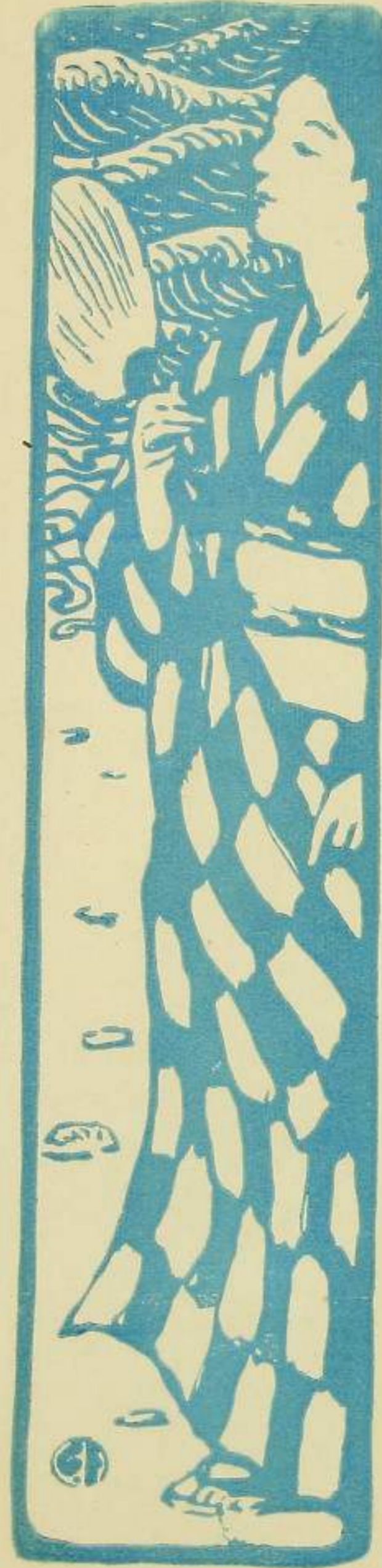
庭下駄に水をあやぶむ花あやめ鉄はさまにたらぬ  
ぬ力をわびぬ

柳ぬれし今朝けさ門かどすぐる文ふづかひ青貝あざずり  
のその箱はこほそき

戀を知らでわれ美を神にもとめにき君に  
今日けふみる天あまの美地の美

その友はもだえのはてに歌を見ぬわれを  
召よす神かみきぬ薄うす黒くろき

そのなさけかけますな君罪の子が狂くるひの  
はてを見むと云いひたまへ



よぶ名ききて鸚鵡かきのぬかに指をそへうた  
むとせしも人うらむ心

もろかりしはかなかりしと春のうた焚く  
にこの子の血ぞあまり若き

夏やせの我やねたみのはたち二十妻里居いほの夏に  
京を説く君

こもり居に集むの歌ぬくねたみ妻さ五月ごのや  
ごの二ふた人りうつくし



舞 姫

人に侍る大堰の水のおばしまにわかきう  
れひの袂の長き  
べに筆に人はなかばをかきさしぬ西のみ  
やこの春雨の歌

朝を細き雨に小鼓おほひゆくだんだら染  
の袖ながき君  
人にそひて今日京の子の歌をさく祇園清  
水春の山まるき  
くれなるの襟にはさめる舞扇酔のすさび  
のあととめられな

桃われの前髪ゆへるくみ紐やときいろな  
るがここたらぬかな

浅黄地に扇ながしの都染九尺のしごき袖  
よりも長き

四條橋おしろいあつき舞姫のぬかささや  
かに撲つあられかな

さしかさす小傘に紅き揚羽蝶小褙とる手  
に雪ちりかかる

舞姫のかりね姿ぞうつくしき伏見をくだ  
る春の川舟

紅梅に金糸のぬひの菊づくし五枚かさね  
し襟なつかしき

舞ぎぬの袂に聲をおほひけりこのみ闇  
の春の廻廊

まこと人を打たれむものかふりあげし袂  
このまま夜をなに舞はむ

三たび四たびおなじしらべの京の四季お  
とどの君をつらしと思ひぬ

あでびとの御膝へおぞやおとしけり行幸  
源氏の巻繪の小櫛

しろがねの舞の花櫛おもくしてかへす袂  
のままならぬかな

四とせまへ鼓うつ手にそそがせし涙のぬ  
しに逢はれむ我が

おほづつみ抱<sup>か</sup>へかねたるその頃よ美<sup>よ</sup>き衣<sup>き</sup>  
きるをうれしと思ひし

われなれの千鳥なく夜の川かせに鼓拍子<sup>つみびやうし</sup>  
をとりて行くまで

いもうどの琴には惜しきおぼる夜よ京の  
子こひし鼓のひと手

よそほひし京の子すゑて絹<sup>きぬ</sup>のべて繪の具  
とく夜を春の雨ふる

春 思

いとせめてもゆるがままにもえしめよ斯  
くぞ覺ゆる暮れて行く春

春みぢかし何に不滅ムツクの命イデぞちからある  
乳を手にさぐらせぬ



夕月に人どつれだつ川づつみ野ばらに白  
きちか道<sup>ま</sup>避けぬ

そのはてにのこるは何と問ふな説くな友  
よ歌あれ終<sup>は</sup>の十字架

わかき子が胸の小琴の音<sup>ね</sup>を知るや旅ねの  
君よたまくらかさむ

松かげにまたも相見る君とわれゑにし  
の神をにくしとおぼすな

きのふをば千とせの前の世とも思ひ御手  
なほ肩に有りとも思ふ

歌は君酔ひのすさびと墨ひかばさても消  
ゆべしさても消ぬべし

神よごはにわかきまごひのあやまちごこ  
の子が悔ゆる歌きまますな

湯あがりを御風めすなのわが上衣ゑんじ  
むらさき人うつくしき

さればとておもにうすぎぬかづきなれず  
春ゆるしませ中の小屏風

しら綾に鬢の香しみし夜着よぎの襟そむるに  
歌のなきにしもあらず

夕ぐれの霧のまがひもさとしなりき消え  
しともしび神うつくしき

もゆる口になにを含まむぬれといひし人  
のをゆびの血は涸れはてぬ

人の子の戀をもとむる唇に毒ある蜜をわ  
れぬらむ願ひ

ここに三とせ人の名を見ずその詩よます  
過すはよわきよわき心なり

梅の溪の霨もよぎくれなるの朝すがた山うつく  
しき我れうつくしき



ぬしや誰れねぶの木かげの釣床つりどの網あみのめ  
もるる水色のきぬ

歌に聲のうつくしかりし旅人の行手の村  
の桃あかかれな

朝の雨につばさしめりし鶯うぐいすを打たむの袖  
のさだすぎし君

琴だきて三とせを京の扇あふぎをりわが世の戀  
のさておもしろき

春寒はるさむのふた日を京の山ごもり梅うめにふさは  
ぬわが髪かみの亂れ

歌筆うたふでを紅べににかりたる尖凍さきいてぬ西にしのみやこ  
の春さむき朝

春の宵をちひさく撞きて鐘を下りぬ二十  
七段堂のきざはし

手をひたし水は昔にかはらずとさけぶ子  
の戀われあやぶみぬ

病むわれにその子五つのをとうとよつた  
なな笛をあはれと聞く夜

とおもひてぬひし春着の袖うらにうらみ  
の歌は書かさせますな

かくて果つる我世さびしと泣くは誰ぞし  
る桔梗さく伽藍がらんのうらに

人とわれおなじ十九のおもかげをうつせ  
し水よ石津川の流れ

卯の花を小傘ちさきにそへて袂とりて五月雨わ  
ぶる村はづれかな

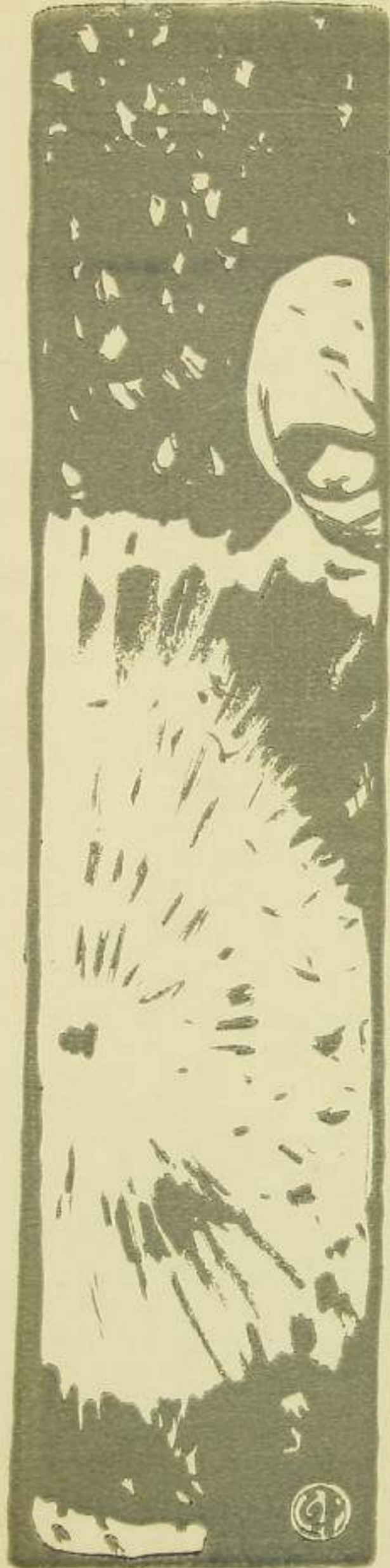
村はづれひもも花さく板橋の橋のたもと  
を右へわかれぬ

夏花に多くの戀をゆるせしを神悔い泣く  
か枯野ふく風

道を云はず後を思はず名を問はずここに  
戀ひ戀ふ君と我と見る

魔に向ふつるぎの束つかをにぎるには細き五  
つの御指みゆびと吸ひぬ

消えむものか歌よむ人の夢とそはそは夢  
ならむさて消えむものか



戀と云はじそのまぼろしのあまき夢詩人  
もありき晝だくみもありき

君さけぶ道のひかりの遠を見ずやおなじ  
紅なる靄たちのぼる

かたちの子春の子血の子ほのほの子いま  
を自在の翅なからずや

ふとそれより花に色なき春となりぬ疑ひ  
の神まごはしの神

うしや我れさむるさだめの夢を永久とほにさ  
めなと祈る人の子におちぬ

わかき子が髪のしづくの草に凝りて蝶ど  
うまれしここ春の國

結願けつがんのゆふべの雨に花ぞ黒き五尺こちた  
き髪かるうなりぬ

罪おほき男こらせと肌きよく黒髪ながく  
つくられし我れ

そとぬけてその露つゆおちて人を見ず夕の鐘  
のかたへさびしき

春の小川うれしの夢に人遠き朝を繪の具  
の紅き流さむ

もろき虹の七いろ戀ふるちさき者よめで  
たからずや魔神まじんの翼つばさ

酔に泣くをどめに見ませ春の神男の舌の  
なにかするどき

その酒の濃きあちはひを歌ふべき身なり  
君なり春のおもひ子

花にそむきダビデの歌を誦せむにはあま  
りに若き我身とぞ思ふ

みかへりのそれはた更につらかりき闇に  
おぼめく山吹垣根

ゆく水に柳に春ぞなつかしき思はれ人に  
外ならぬ我れ

その夜かの夜よわきためいさせまりし夜  
琴にかぞふる三どせは長き

きけな神戀はすみれの紫にゆふべの春の  
讃嘆のこゑ

病みませるうなじに織ほきかひな捲きて熱  
にかわける御口みくちを吸はむ

天の川そひねの床のとばりごしに星のわ  
かれをすかし見るかな

染めてよと君がみもとへおくりやりし扇  
かへらず風秋あきとなりぬ

たまはりしうす紫の名なし草うすきゆか  
りを歎きつつ死なむ

うき身朝をはなれがたなの細柱ほそはしらたまはる  
梅の歌ことたらぬ

さおぼさずや宵の火かげの長き歌かたみ  
に詞あまり多かりき



その歌を誦<sup>ず</sup>します声にさめし朝なでよの  
櫛<sup>う</sup>の人はづかしき

明日<sup>あす</sup>を思ひ明日の今おもひ宿の戸に倚<sup>よ</sup>る  
子やよわき梅暮れそめぬ

金色<sup>こんじよ</sup>の翅<sup>は</sup>あるわらは躑<sup>つ</sup>躑<sup>じ</sup>くはへ小舟<sup>せなふね</sup>こぎ  
くるうつくしき川

月こよひいたみの眉はてらさざるに琵琶  
だく人の年とひますな

戀をわれもろしと知りぬ別れかねおさへ  
し袂<sup>たもと</sup>風の吹きし時

星の世のむくのしらぎぬかばかりに染め  
しは誰<sup>たれ</sup>のそがとおぼすぞ

わかき子のこがれよりしは鑿のりのにほひ美  
妙たみの御相みけふ身にしみぬ

清し高しさはいへさびし白銀しろがねのしろきほ  
のほと人の集見あひまし（醉茗の君の詩集に）

雁かりよそよわがさびしきは南なりのこりの  
戀こひのよしなき朝夕あさゆふ

來し秋の何にか似たるわが命せましちひ  
さし萩よ紫苑よ

柳あをき堤にいつか立つや我れ水はさば  
かり流ながとからず

幸さいおはせ羽やはらかき鳩とららへ罪ただし  
たる高き君たち

打ちますにしろがねの鞭うつくしき愚か  
よ泣くか名にうとき羊ひつじ

誰に似むのおもひ問はれし春ひねもすや  
は肌もゆる血のけに泣きぬ

庫裏くらの藤に春ゆく宵のものぐるひ御經みきやうの  
いのちうつつをかしき

春の虹ねりのくけ紐たぐりますはらうひ神がみの  
曉あけぼののかをりよ

室むろの神に御肩みかたかけつつひれふしぬるんじ  
なればの宵よの一襲ひとかまね

天あまの才さいここにほひの美しき春をゆふべ  
に集あはゆるさすや

訂正版  
不許複製

明治三十四年八月五日印刷  
明治三十四年八月十日發行  
明治三十四年七月廿三日版印刷發行  
明治三十四年九月十一日版印刷發行

發賣元

大阪東區南本町座原前  
杉本書店  
東京橋區五郎兵衛町  
金尾文淵堂

著者  
發行所  
發行者  
印刷所

與謝野品子  
金尾種次郎  
杉本要  
株式會社  
大阪活版製造所

(定價金參拾五錢)

消えて凝りて石と成らむの白桔梗秋の野  
生の趣味さて問ふな

歌の手に葡萄をぬすむ子の髪のやはらか  
いかな虹のあさあけ

そと秘めし春のゆふべのちさき夢はぐれ  
させつる十三絃よ

